

## 態度と呼応のためのプラクティス no.02

小宮知久（作曲家）× 木下知威（歴史学者）

# エコーの極点

2022. 12. 10 (Sat.) 14:30 / 18:00 Start

会場 | Venue

トーキョーコンサーツ・ラボ | Tokyo Concerts Lab.

主催 | Organizer

東京コンサーツ | Tokyo Concerts 〈文化庁「ARTS for the future! 2」補助対象事業〉

協力 | Cooperation

錦城高等学校吹奏楽部

## 態度と呼応のためのプラクティス

『態度と呼応のためのプラクティス』は、若手・中堅音楽家が異なる専門性を持つ他者との共同制作に取り組む企画シリーズです。両者が、これまで培ってきた経験や技術を固有の「態度」として持ち寄り、互いに向き合い「呼応」しあうことによって、領域を超えた新たな表現の生成を目指します。

シリーズ第2回目となる今回は小宮知久を紹介します。作曲家の小宮は、アコースティックな音楽作品に限らず、身体とコンピュータの間に生じる齟齬に着目した声のためのメディアパフォーマンス作品など、領域や特定の手法に捉われない音楽作品の制作を行なっています。

小宮と共同で制作を行うのは、近代における身体障害の歴史を専門とする木下知威です。ろう者でもある木下は、人間の身体を取り巻く環境や知覚、表象に関心をよせて研究をしています。また、アーティストとともにパフォーマンスを行うなど、多岐にわたる活動に取り組んでいます。

本公演では「エコー」をキーワードに、人間の声や楽器の発する音を介して、ろう者と聴者の間にある音楽の差異、あるいは共通するものを問うことで、知覚の先に存在する音像や音楽を探求していきます。

## 到達できないことの崇高さ

小宮知久

私たちは私たちの身体の条件やフレームで世界を認知している。世界というのは私という身体による一つの切り取られでしかないのだ。

音に関してもそうである。身体の条件や経験が変われば音の立ち現れ方が変わる。

木下さんと一緒にピアノを弾いたとき、ピアノから身体に返ってくる振動があることを教えてくれた。そしてそれは中音域のある音から高音になると消え、その下からは豊かな振動のバリエーションがあるという。ソリッドな振動を伝えてくれる音、微かな振動の音、怖い感じの振動がする音。私にはピアノの音が聴こえてしまうのでピアノから返ってくる振動なんて考えたことがなかったし、木下さんのような精度でその振動を知覚し記述することができないだろう。

ピアノを弾くという体験はこんなにも異なる体験だったのだ。

また、木下さんと声楽家の歌う身体に触れるワークショップをしたときも、私には感知できないような身体の振動や声楽家の声自体を言葉にしてくれた。風がぶつかってくる感じ、野菜炒めの野菜がうまくひっくり返った時のゴロンとした感じ、ある高音以上になると身体が硬直すること。

私は声楽家の声は歌声としてどうかとしか聴いていなかった。もしくは「ソプラノの声」というラベリングでしか感知していなかったのかもしれない。

私には到達できない木下さんの知覚の世界が広がっていた。

それとは逆に木下さんには決して到達できない音の世界がある。

お互いがお互いに決して到達できない音の体験が同じ時間に横たわっていた。

私たちが当然のものと思っている世界がほんの一面でしかなく、知らない顔が同じ時間に垣間見えるという、その豊かさ。

それが作品の中で起こるといいと思った。

## 《エコーの極点》

木下さんとの対話の中で、音や振動を知覚した際に身体に残存するものを「エコー」と名付け、今回のキーワードにした。

ソプラノ、トロンボーン、ピアノは知覚者である木下さんに「エコー」を残存させるべく演奏する。その「エコー」を知覚者は記述する。

知覚者、ソプラノ、トロンボーン、ピアノは同じ時間を共有しながらも互いに到達しえない知覚で並走する。

しかし知覚者のテキストとアクションは演奏に影響し、演奏者の音とアクションは知覚者のテキストに反映される。異なる世界による柔軟なフィードバックのアンサンブルが「エコー」を軸に形成される。

それは訓練された音楽家だけによる精緻で圧巻のアンサンブルとは異なり、手探りで不器用なおずおずとした身振りかもしれない。でもその態度こそ今回の作品の価値であるように思う。到達できない世界や存在にたじろぐこと。そこからはじまる。それでもなおフィードバックを繰り返し、アンサンブルを試みる。「エコー」というキーワードから私たちの知っている音は宙吊りになり、その未だ知り得ない顔が立ち現れるかもしれない。

エコー：音や振動を知覚した後に身体に残存する何か。

この作品では知覚者にエコーを残存させるべくソプラノ、トロンボーン、ピアノがセッションをする。知覚者は知覚したエコーをその場でテキストにする。そのテキストは読み上げられたり演奏されたり、演奏する音の選択に影響を与えることで、結果的に知覚者はアンサンブルに巻き込まれ、知覚者、ソプラノ、トロンボーン、ピアノのカルテットとなる。

その各セッションの間には知覚者の手話によるレクチャーが挟まる。

即興の枠組みについて

各セッションでは「点の音楽」「線の音楽」「痙攣の音楽」「喋りの音楽」の4つの即興演奏の枠組みを使用する。これを徐々に移行したり交互に演奏することで音楽を形成する。

### 1. 「点の音楽」...

ある程度持続時間のある任意の単音を演奏する。

これは最初の打ち合わせで木下さんと一緒にピアノを弾いた際の音の記憶。

### 2. 「線の音楽」...

主にベートーヴェンの第九の特定の旋律を断片的に演奏する。この旋律は木下さんと櫻井さんの歌声に触れるワークショップをした際に実際に歌った8小節の断片。この旋律からプログラムノートに掲載した3つのダイアグラムが生まれた。

### 3. 「痙攣の音楽」...

違う音程の任意の2音を素早くかつ不規則に交互に演奏する。痙攣したような動きになる。これは木下さんに私の過去の作品を見せた際の演奏者の動きの記憶。

### 4. 「喋りの音楽」...

プロジェクターに投影されているテキストを朗読する。もしくは声に出した時の抑揚を模倣して演奏する。

## 音楽は二度消える

知覚者：木下知威（手話通訳：伊藤妙子）

イントロダクション。知覚者によって音とエコーの知覚について手話で語られる。

## エコーは消え去りつつ堆積する（Session I）

知覚者：木下知威 ソプラノ：櫻井愛子 ピアノ：小宮知久

点の音楽が次第につながっていき、エコーを堆積するための旋律の断片（線の音楽）が重なっていく。

## ろう教育と口

知覚者：木下知威（手話通訳：伊藤妙子）

ろう者が口で語ること、口を見ることについて。

## 外化された横隔膜と声帯（Session II）

知覚者：木下知威 ソプラノ：櫻井愛子 トロンボーン：茂木光伸

トロンボーンの痙攣的で横隔膜のような身体／スライドの運動やその音がエコーとして知覚者の身体に残存していく。その動きはやがて緩慢になり、声のような音になってゆき、本当の声（ソプラノ）とともにプロジェクターに映し出されている知覚者のテキストを読み上げる。エコーを記述するテキストが読み上げられ演奏されることで、さらにそれがエコーを残存させる音楽となる。

## 音の内在・外在について

知覚者：木下知威（手話通訳：伊藤妙子）

ソプラノとトロンボーンの身体性の違いについて。

## アポロとダフネ（Session III）

知覚者：木下知威 ソプラノ：櫻井愛子 トロンボーン：茂木光伸

ピアノ：小宮知久

これまで登場した「点の音楽」「線の音楽」「痙攣の音楽」「喋りの音楽」の4つが各演奏者によって演奏される。知覚者は各演奏者に響きや振動の性質が変化するアイテムを促したり積極的にセッションに参加する。知覚者と演奏者が互いにインタラクションを取ることでアンサンブルになる。音楽や（触覚的、視覚的）振動が重なり合うことで様々な種類のエコーがお互いの身体や観客の身体に残存していく。

## 音楽は二度消える

知覚者：木下知威

エビローグ。身体に残存するエコーについて。

## プロフィール

### 小宮知久 | KOMIYA Chiku

1993年生まれ。作曲家。音楽のさまざまな規範（楽譜、作曲行為、聴取の方法など）を問い直すべく、現代のメディア環境と身体性を考察して新たな音楽を探究している。近年では自身のメディアパフォーマンス作品《VOX-AUTOPOIESIS》シリーズをインスタレーションとして展示した個展「SEIRÊNES」を開催するなど、楽譜ベースの音楽作品から電子音響作品、メディアパフォーマンス、インスタレーションなど領域横断的に制作している。

東京藝術大学音楽学部作曲科卒業後、東京藝術大学大学院音楽研究科作曲専攻修了。近年の活動や受賞に、小宮知久個展「SEIRÊNES」（2022）。第24回文化庁メディア芸術祭アート部門新人賞（2021）。Music from Japanにより委嘱されNYにて弦楽四重奏曲の初演（2020）。第87回日本音楽コンクール作曲部門（オーケストラ作品）第2位（2018）など。

### 木下知威 | KINOSHITA Tomotake

1977年生まれ。日本社会事業大学非常勤講師。博士（工学）。専門は建築計画学、建築史、身体障害者の歴史。幕末から明治・大正期にかけてのろうあ学校（盲人・ろうあ者への教育組織）の建築空間・社会・文化の分析を通じて、盲人とろうあ者の形成について考察している。また、ろうあ者の知覚現象についての記述も行っている。近年の著述に「知覚のクラッシュ」（2020）、「点字以前」（2019）、「ひとりのサバイブ」（2018）、『伊沢修二と台湾』（2018）、「指文字の浸透」（2017）など。

## 残像の見立て

木下知威

### 櫻井愛子 | SAKURAI Aiko

東京都出身のソプラノ。NHK東京児童合唱団での経験を活かし、これまでに数多くの声楽曲・合唱曲を初演。主宰する秋山カルテットでは様々な時代・様式・言語の室内楽歌曲を演奏している。令和4年度奏楽堂日本歌曲コンクール歌唱部門第一位、第26回ブラームス国際コンクール声楽部門（ペルチャッハ）第2位他国内外で多数受賞。東京藝術大学大学院声楽専攻及びウィーン国立音楽大学リート・オラトリオ科修士課程修了。

### 茂木光伸 | MOGI Mitsunobu

トロンボーン奏者。洗足学園大学音楽学部卒業、東京藝術大学音楽学部別科修了、バーゼル音楽院修士パフォーマンス科および修士ソリスト科にてディプロム取得。これまでの受賞・活動歴に「第11回Premio Citta'di Padova」管楽器部門第3位（2013）、現代音楽アンサンブル「アンサンブル・ディアゴナル」のメンバーとしてルツェルン音楽祭への参加（2011）など。

「待ってたよ 君の分だ」

*"This is so nice of you. I got you a baklava."*

昔付き合っていた恋人の家で突然「うるさい」と言われたとき、わたしはビニール袋を畳んでいるところだった。何のことかわからずにいると「それが」という。それを丸めると「そう、その音がうるさい」と不快な顔をする。ビニールを折ると、手にパキパキした感触が残る。これが音なのか。ビニールから音がするということをはじめて知ったときだ。

それだけに、耳の聞こえない人が演奏会などの行事に参加するときに音をどのように認識するかというテーマが伴う。これについて、たとえば風船や音を振動や光に置き換えるデバイスを使って、音を別の感覚に置き換える方法がある。それはひとつの解だが、この公演では触覚と視覚による残像（afterimage）という概念を提示する。

#### I. 触覚

会場となるトーキョーコンサーツ・ラボにはグランドピアノがある。蓋を開けるとYAMAHAの金の文字がある。親がピアノの先生をしていた関係で、実家にあるピアノと同じメーカー、形式も近い。蓋をあけると、黒が切り裂かれて真っ白な鍵盤がみえる。真ん中からやや左寄りのところで、鍵をひとつたたくと、向こう側から弦の応答が反響してくる。反響というよりは、指で鍵をたたく行為の結果としてのエコーといってもよいだろう。

徐々に鍵盤の右側、高音にむかって指を動かすと、Hの金文字の下にある「ラ」のあたりでピアノが反応しなくなる。ピアノが音を出すことを我慢し、音じたいも成長するのを自ら踏みとどまっており、底にぶつかるもののそこから先には何もなく、木をたたいているかのような感触が残る。わたしの指は鍵盤のうえで音のない踊りをせざるを得ない。そこで低音の世界に戻るべく、指を左側に動かしていくと反響が指先にあるようになる。

## II. 視覚

わたしは「知覚者」として、知覚した内容を記述するパフォーマンスをする。わたしは耳が聞こえないために、かなりの音でないと聞こえることはなく、感音性の聴覚障害のために音の内容を理解することはできない。

そこで、残像の概念を梯子として使いたい。一般的に、心理学の用語として刺激を与えたあとに残る感覚として定義される。光を見つめたあと、網膜に光の形が残存するといったことだ。しかし、それはたんなる生理現象にとどまるものではない。外山滋比古は、文章や詩歌にも残像がみとめられるとして修辭的残像の概念を提示している。芭蕉の句「行く春や鳥啼き魚の目は涙」は「行く春や」で曖昧なイメージを提示しつつ、続く「鳥啼き」が「行く春や」を受けらることで悲しみの情が提示され、「魚の目は涙」で焦点が明瞭化されると外山は指摘した。ようするに、修辭的残像とは「表現単位の中の空白によって生じる余韻」のことだ。

残像はさまざまなところにある。映画も然り。サスペンス映画『ボディ・バンク』（1996年）で、医師（ヒュー・グラント）が知人の医師（サラ・ジェシカ・パーカー）に採点を手伝ってもらうためにカフェでおちあうシーンをみよう。

医師がコーヒーを片手に採点をしている（図1）。カフェに入ってきた人に彼はコーヒーを飲みながら顔をあげ（図2）、立ち上がった彼に知人が近づいてくる（図3）。知人は背負っていたリュックをおろし、医師は「待ってたよ（This is so nice of you.）」と声をかける（図4）。お菓子のバクラヴァを指さしながら「君の分だ（I got you a baklava.）」という。これは机のうえにある積み重なった答案をも意味しよう（図5）。

彼のいう「待ってたよ」「君の分だ」は、ひとまとまりの字幕としてふたつのショット（図4と5）をまたがる形で表示されている。外山の主張に倣うなら、「待ってたよ」の声のあとに続く刹那、「君の分だ」と続くふたつの文章のあいだに余韻が残る。かつ、男女が向かい合うことで認識される空間を貫通して字幕が表示されることで、彼の声がカフェの室内空間に響いている。これらを映像における残像と定義してよい。

この考え方のもと、パフォーマンスでは自らの身体を使って、外にある音楽の要素と相互に作用しあうことで残像の探索を試みる。音楽の要素とは、ソプラノが歌唱する表情、衣服の特徴、開閉する口、骨を伝う振動、膨張と収縮を繰り返す皮膚。楽器の光沢、鍵盤やスライドと腕の運動。うなづく頭。足どりの仕方。楽器の曲面にみえる歪んだ鏡像、といった触覚と視覚のことだ。これらから見立てられた残像を遡上していくかたちで音楽を試みたい。

タイトルにある「エコー」はさしずめ、レトリックとしての残像であろう。



図1



図2



図3



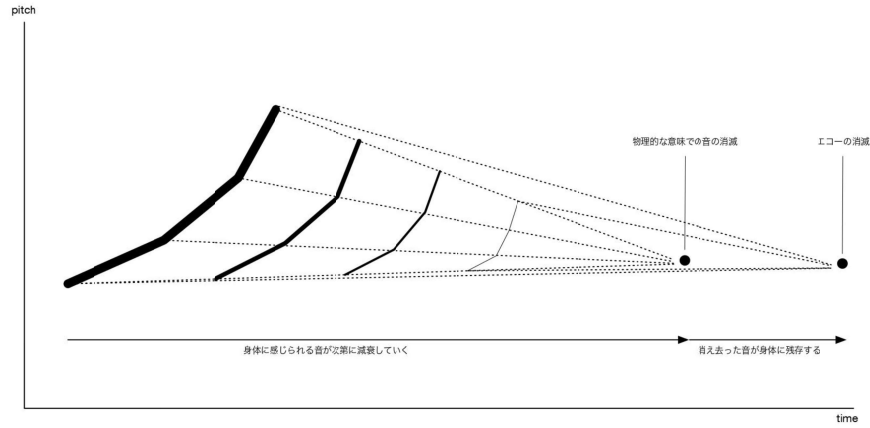
図4



図5

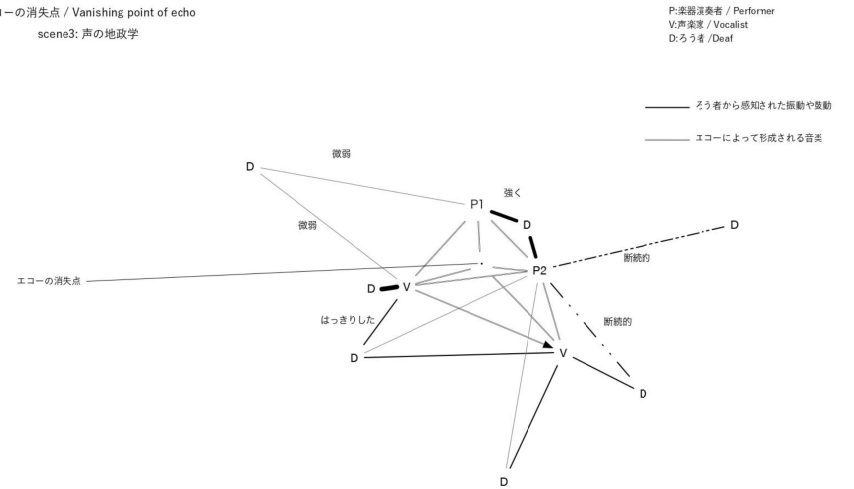
# エコーのダイアグラム

エコーの消失点 / Vanishing point of echo  
scene1: 音楽は二度消える



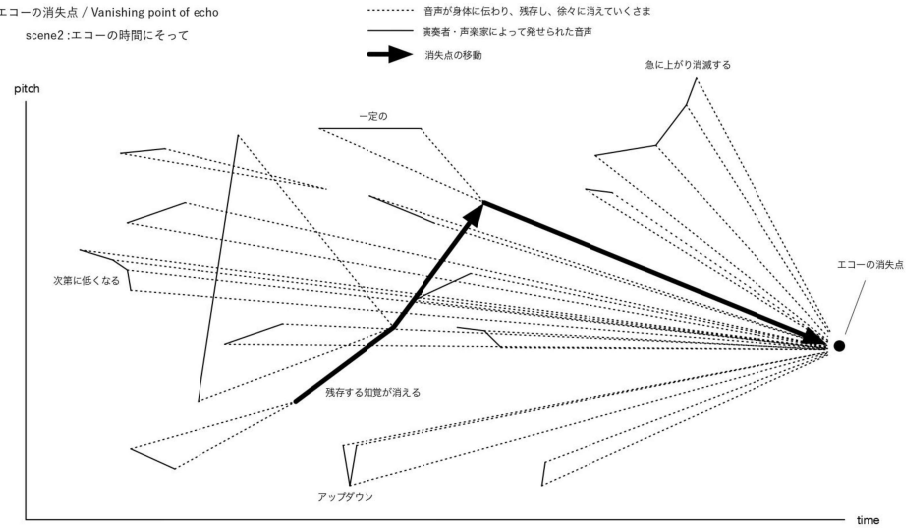
音楽には消滅が二度おとされる。ひとつは音が消え去る時、もうひとつがエコーが消え去る時だ。スパークした音声が減衰し、消えていく。いつどこで消えたのかは確かめられない。しかし消えてもなお、音声は身体に残存している。

エコーの消失点 / Vanishing point of echo  
scene3: 声の地成学



中心を発見するとエコーが強く感じられ、声が見え始める。しかし、近づくほど逃げさせていく。アポロとダフネの物語は声の物語に置き換えられるだろう。

エコーの消失点 / Vanishing point of echo  
scene2: エコーの時間にそって



点線(残存する音)の重なりがある形を住む。声の透視図法。その先にある消失点には何も無い。

演奏時間が長くなるにつれ、エコーが枯れ葉のように経線として重なり、音が現出せる。そこを目指して行くと、消失点に到着する。それはひとつではなく、時間の経過とともに現れたり消えたりする。

## 態度と呼応のためのプラクティスについて

### 第1回『ごろつく息』

坂本光太（チューバ奏者）× 和田ながら（演出家）

日時：2021年12月29日（水）19:00 開演

会場：トーキョーコンサーツ・ラボ

出演：坂本光太

演出：和田ながら

出演（俳優）：長洲仁美

音響：甲田 徹

作曲（委嘱）：池田 萌

演出助手：小原 花

フライヤーデザイン：関川航平

### これからの公演

#### 第3回『ヴォカリーズ・レッスン』

松本真結子（作曲家）× 関川航平（アーティスト）

日時：2022年12月27日（火）15:00 / 19:00 開演

会場：トーキョーコンサーツ・ラボ

音について考える：松本真結子

猫について考える：関川航平

歌うことができる：溝淵加奈枝

フライヤーデザイン：関川航平

## 態度と呼応のためのプラクティス

エコーの極点 小宮知久（作曲家）× 木下知威（歴史学者）

### 出演

小宮知久（作曲家）

木下知威（知覚者）

櫻井愛子（ソプラノ）

茂木光伸（トロンボーン）

----

手話通訳 伊藤妙子

テクニカル 横川十帆

映像撮影・配信 後藤 天、今堀拓也

フライヤーデザイン 関川航平

制作 西村聡美（東京コンサーツ）